雪と共生する湯沢町
道の移り変わりをたどる

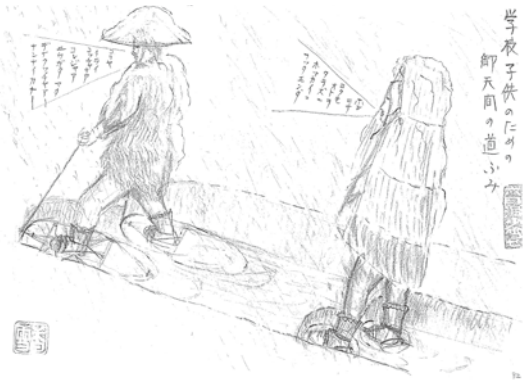
雪みち今昔物語

湯沢町は特別豪雪地帯に指定されており、約3mもの雪が暮らしを覆う国内有数の豪雪地帯です。豊富な雪は観光・経済の柱として欠かせなく、今年もスキーをはじめとしたウィンタースポーツを楽しみに多くのお客様から町を訪れていただいております。

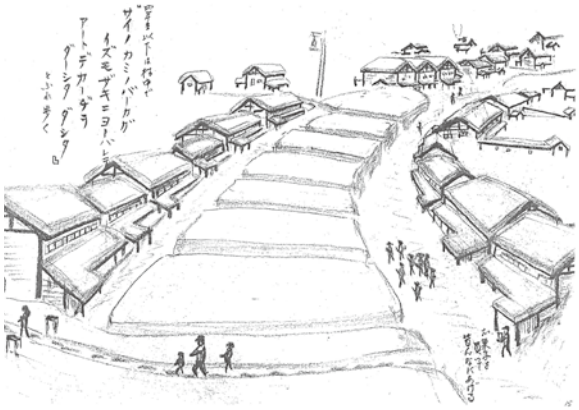
雪国ならではの習慣「道ふみ」

多量の雪は私たちの生活に大きな影響を与えてきました。表紙で1950（昭和30）年代と現代の写真を比較しましたように、約70年前の冬は、積もった雪で家々が覆われる生活が日常でした。雪が積もった日には、家の前、また、通りの中心を踏み固めるための「道ふみ当番」（資料1）があり、雪国ならではの習慣が行われてきました。

その地域によって道のつくり方も異なり、例えば三俣地区では、家の前を各自で踏み固めることは他の地区と同様ですが、道の真ん中はすべて踏まずに残し、向かい側の家々と行き来するための道だけ、間隔を空けてつけていたそうです（資料2）。



（資料1）「道ふみ」画/関 吉夫さん（みつまたロッヂ様提供）



（資料2）「〆め焼」画/関 吉夫さん（みつまたロッヂ様提供）
家々の前の雪は踏み固めるが、道の真ん中は固めずに残している。向かい側の家と行き来するための道はつけられている。

機械除雪と消雪パイプの導入

現代の私たちは、冬期間であっても、かんじきを履かずに道路を歩けたり自動車に乗って出かけることができます。これには、機械除雪と消雪パイプの導入が大きく寄与しています。1963（昭和38）年に国道17号で機械除雪が開始されたことを皮切りに、1966（昭和41）年頃から県道や町道でも機械除雪の導入が始まりました。除雪作業といっても「新雪除雪」、「拡幅除雪」等、多岐にわたり、それぞれに除雪作業員の方の技術が活かされています。町外に出かけると、除雪後の凸凹（でこぼこ）の無さや雪の積み方等、改めて湯沢町の除雪作業員の方々の技術力の高さを実感することが多いのではないでしょうか。

消雪パイプは1961（昭和38）年に長岡市で初めて実用化され、湯沢町には1966（昭和41）年に越後湯沢駅周辺に敷設（ふせつ）されて以降、少しずつ広まっていきました。外気温に影響されず、水温が一定のため、井戸を掘削しポンプを使って地下水をくみ上げ道路上に散水することで雪を融かします。

こうして雪を克服することで、冬でも気軽に外出でき、湯沢町はウィンターリゾートの地として多くのお客様を迎え入れることができるようになりました。